

## ごあいさつ

『仮面のありか…フェースのゆくえ』展を開催します。

中部大学民族資料博物館の2018年秋季企画展示は、収蔵資料を中心に、とくに「顔」の表現に焦点をあて、人間像の在りようについて、その形と意味を考えます。

太古の祭礼の姿を伝えるアフリカやオセアニアの仮面、神話の世界をテーマにした東南アジアの仮面、そして日本の能面などに、美の起源の一端を探ろうとするコレクション・テーマ展示です。

そのため展示を4つのテーマに分類して構成しました。

- 第1章 <美の起源、「飾る」と「祈り」>……色彩と文様にみる祖先の霊魂
- 第2章 <眼の力、眼の主張>……オセアニアと東南アジアの神像の大きな眼
- 第3章 <半眼>……日本の仏像と絵画にみる眼差し
- 第4章 <中間表情とは>……能面とアフリカの祭礼のための仮面

また2階の会場とは別に1階入口に、1945年の東京でアメリカ空軍のカメラマンが撮影した記録写真を展示しました。そこにみる母と子の「顔」の表情には、敗戦直後の日本の社会と、そこに生きる人々の姿をみることができます。それはまた、現在の私たちの出発点ともいえるでしょう。

仮面は母なる大地を守る秘儀の女司祭たちの被るものであり、それが男たちの手にわたるのは、ずっと後の時代のことのようにです。そして仮面に対する欲求は人間存在の普遍的な願望となり、真実の顔と虚妄の顔という二重の顔を意識するに至ります。仮面をつけた者は、相手に一体誰なのか判らない不安と恐れを与え、同時に仮面をつけた本人は、自分の存在すら脅かされることになるかもしれません。この二重の顔は、現代の変身や変装、そして化粧の行方すらも暗示しているようです。

この企画展『仮面のありか…フェースのゆくえ』を見ながら、人間と仮面の不思議な関係、そして新たな仮面と顔のゆくえに思いを馳せてくだされば幸いです。

最後になりましたが、本展開催にあたり、ご指導、ご協力いただきました関係各位に対し深くお礼申し上げます。

2018年10月 中部大学民族資料博物館館長 荒屋鋪 透